

## 英語学習における「Google 革命」?

寺 秀幸

ついにこの日がやってきたかと思った。

A子が提出してきた人種差別に関するエッセイはほぼ完璧な英語で書かれていた。冠詞の使い方にやや不自然な部分もあったが他には文句のつけようのない正確な文法である。しかも、その文章は正確だけでなく圧倒的な表現力をもっていた。日本語的な発想から抜け出た英語らしい表現がふんだんに使われていた。それは今まで私が指導してきた多くの学生の作文とは一線を画する出来のものであった。

問題は、A子がつい一ヶ月前までは、他の多くの学生と同じように、日本語表現に影響された直訳的かつ文法的にもあやしいエッセイを書いていたということである。いったいどのようにしてこのような劇的な進歩が起こったのであろうか。もしかしたら剽窃なのだろうか。それとも、なにか画期的な学習方法を見つけたのだろうか。

実は、私には、インターネットの普及にともないこのような現象がいずれ起きるのではないかという予感があった。そして、今回、A子本人から執筆過程の説明を聞かせてもらい、その予感が当たっていたことを確信するに至った。彼女の説明によると、今回のエッセイはアウトラインも実際の作文もすべて自分で書いたものだということであった。ただ、いつもと違い、今回は単語の使い方に自信がないときは徹底的に Google 検索を活用したというのである。

そのやり方は、こうである。まず、自分なりの英語で文章を作り、その後、自分の英語の使い方が正しいかどうかを Google 検索で丁寧に確かめるのである。たとえば racism という名詞がどのように使われるべきかを知りたいときは、この語を Google で検索する。そうするとネット上にある何万という用例がちどころに集められる。あとは、そのなかから自分に合う用法を探し出して借用すればいい。

また、problem という語を修飾する適切な形容詞を見つけたいときは、「ワイルドカード」を使って “\* problem” と入力する。すると、この語と共起する修飾語がほぼ無数にリストアップされる。このようにしていくと、この学生のように文型や修飾方法に関する一定の知識があり、かつ英語的な文章構成法を学んでいる者はちどころに豊かで強力な表現力を身につけることができるのである。インターネットは膨大な英語表現を有するコーパスなのである。

しかし、問題は残る。これは本当の英作文と言えるのであろうか。学生が Racism is not a new problem, but it is a very important problem for us today. と書かないで Although racism is an age-old phenomenon, it is a problem of crucial importance in the contemporary

world. と書いたとき、それは盗作にはならないのだろうか。また、たとえ許されるにせよ、このようなやり方で本当の英語力が身につくのだろうか。

このように考えると、インターネットは作文学習のあり方を根本的に変えてしまうかのように思える。だが、実際はそうではないのかもしれない。振り返ってみると、インターネット以前の「旧世代」の学生も同じようなやり方で英語を書いてきたのではないだろうか。文の骨格こそは自分で作るが、辞書の例文を参考にして体裁を整えてこなかっただろうか？『〇〇活用辞典』や『××語法辞典』を多用して正しいコロケーションを探さなかっただろうか。「英作文は英借文」という言葉さえあったではないか。Google は単に例文の数を途方もない数に増やしてくれただけなのである。

今後、A子のような方法で作文をする学生が確実に増えてくるだろう。多分、私たちはこの新しい現象を受け入れなければならない段階にきている。どのように受け入れ、どのように指導していくかを考えなければならない時期にきているのである。いや、むしろ、単に受け入れるのではなく、これを活用する方法を積極的に教える方がいいのかもしれない。これにより、次世代の若者は、今まではたやすく手に入れることのできなかつた表現力を確実に身につけることができるようになるかもしれないのだ。